

大滝ダム運用環境調査委員会  
第9回委員会 議事要旨

開催日時：平成 23 年 7 月 29 日(金) 10:00～12:00

開催場所：OMM ビル 5号室 (大阪市中央区大手前1-7-31)

出席者：

- 委員長 角 哲也(京都大学 防災研究所 教授)  
委員 井伊 博行(和歌山大学 システム工学部 教授)  
委員 田中 哲夫(兵庫県立大学 准教授)  
委員 竹門 康弘(京都大学 防災研究所 准教授)

1. 議事

(1) 調査結果について

- ・ ダムによる土砂の捕捉については、ダム直上流では土砂の堆積がみられるものの、堆積が進行している様子はみられなかった。
- ・ 水質は経年的な変化傾向はみられない。プランクトンについては、年によって細胞数の変動、種組成の違いはみられるが、経年的な変化傾向はみられない。しかし、大滝ダムで BOD 等の増加やプランクトンが増殖するケースもみられ、堤体の存在により小規模ながら湛水していることの影響が考えられる。
- ・ 河川形状は衣引で淵の増加がみられ、河床変動では南国栖と衣引では侵食傾向がみられた。また、河床材料は千石橋、妹背大橋及び衣引では、主材料が粗粒化する傾向がみられ、主材料の間隙にはシルトなどの細粒分が増加し、有機物の堆積もみられた。また、大滝ダム堤体完成前と比べると衣引では岩盤や巨石が増加し、礫が減少する傾向がみられた。
- ・ 底生動物は、大滝ダム堤体完成前と比べると、衣引では八工目が増加する傾向がみられた。いっぽう、平成 18 年度以降の変化については、年変動はあるものの経年的な変化傾向は明らかではなかった。
- ・ 魚類は、平成 18 年度以降、種類数の減少傾向がみられた。大滝ダム堤体完成前と比べると、衣引では岩盤化した淵の増加により、カワムツが増加しタカハヤ、ウグイが減少した。また、礫底の瀬の減少により、アカザが減少した。
- ・ 付着藻類は、平成 18 年度以降、優占種としては同様な種が出現している。組成比をみると平成 21 年度以降 *Homoeothrix janthina* が多い傾向がみられるが、支川の滝の瀬橋でも同様な傾向がみられ、大滝ダムの影響とは特定されない。
- ・ アユの体サイズや肥満度は、暫定運用に伴う貯水位降下を行った平成 19、20 年も含めて、地点や年による大きな変化はみられなかった。冷水病も平成 18 年を除いてほとんど確認されなかった。
- ・ 暫定運用に伴う冬期湛水がプランクトン及び水質に及ぼした影響については、暫定運用を行った平成 18、19 年と行っていない平成 20、21 年について、大迫ダムの存在も踏まえて丁寧に比較を行い、今後の本格運用時の参考にする必要がある。
- ・ 下流河川における河床材料、有機物の堆積、底生動物や付着藻類などの変化については、ダムによる流砂の遮断と洪水発生の有無の両面から丁寧に検討を行い、今後の本格運用後の長期変化の基礎資料とする必要がある。

(2) 平成 23 年度の調査計画について

- ・ 事務局案で了承された。

以上